

# AIと社会を考えるためのビジョン、 問題、そしてその対応

東京大学

未来ビジョン研究センター

江間有沙

# ビジョン1: 社会の中の科学技術

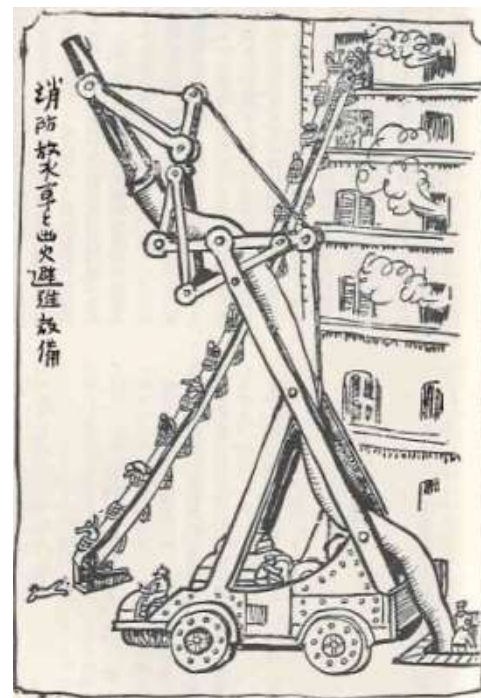
- どういう社会になっていくか
- どういう未来に私たちは住みたいのか



Jean-Marc Cote

“In the Year 2000”

～1900年パリ万博展示ポストカード～



三宅雪嶺主催『日本及び日本人』  
百年後の日本特集（1920）

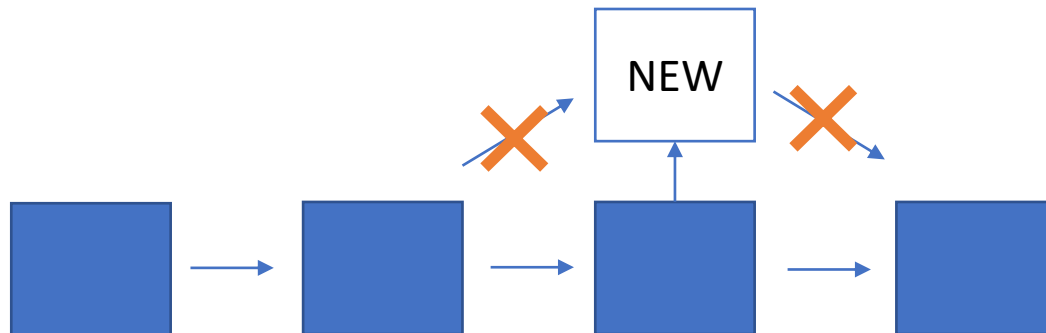
解説：加藤秀俊（評論家・社会学者）

# ビジョン2: AI技術導入の目的

	改善・改良	改革・変革
現状の枠組み	肯定・踏襲	否定・破壊
変化の単位	数か月～1年	数年～数十年
評価尺度	現状の最適化や効率化 ・ 人件費削減 ・ 新たな販路	新たな価値 ・ 働き方や生き方の変化 ・ 新商品やサービス
法律	現行法での対応	法の改正などが必要な場合も
メリット	目に見えて成果がでる	既存の構造的な問題解決
デメリット	部分最適は全体最適にならず、逆に非効率になることもある（ハンコ出社等） 短期的には成果は出るが、頭打ちにあう	時間がかかる、変数多い、関係者が多くなる、ビジョンがぶれると部分最適の寄せ集めで終わってしまう可能性もある

# 問題1: 科学技術と社会の相互作用

- 道具は適切に作動するように他の道具と結ばれてシステムを形成している
- 一部の道具が作動しなければ逆に労働は増すことがある
- 例えば**19世紀の工業化**と**20世紀の家庭家電**によって洗濯など個々のタスクは省力化された。しかしそのため洗濯の量や頻度が増え、召使や業者がやっていた仕事が主婦の仕事となり、洗濯に付随する他のタスク、例えば洗濯物を干す、たたむ等はいずれも自動化されていなかったため、結果的に「お母さんたち」の忙しさは変わらない、あるいは余計な仕事が増えた



ルース・シュウォーツ・コーワン「お母さんの仕事は忙しくなるばかり」



# 問題2: 日本社会構造とAI事故時の責任の所在

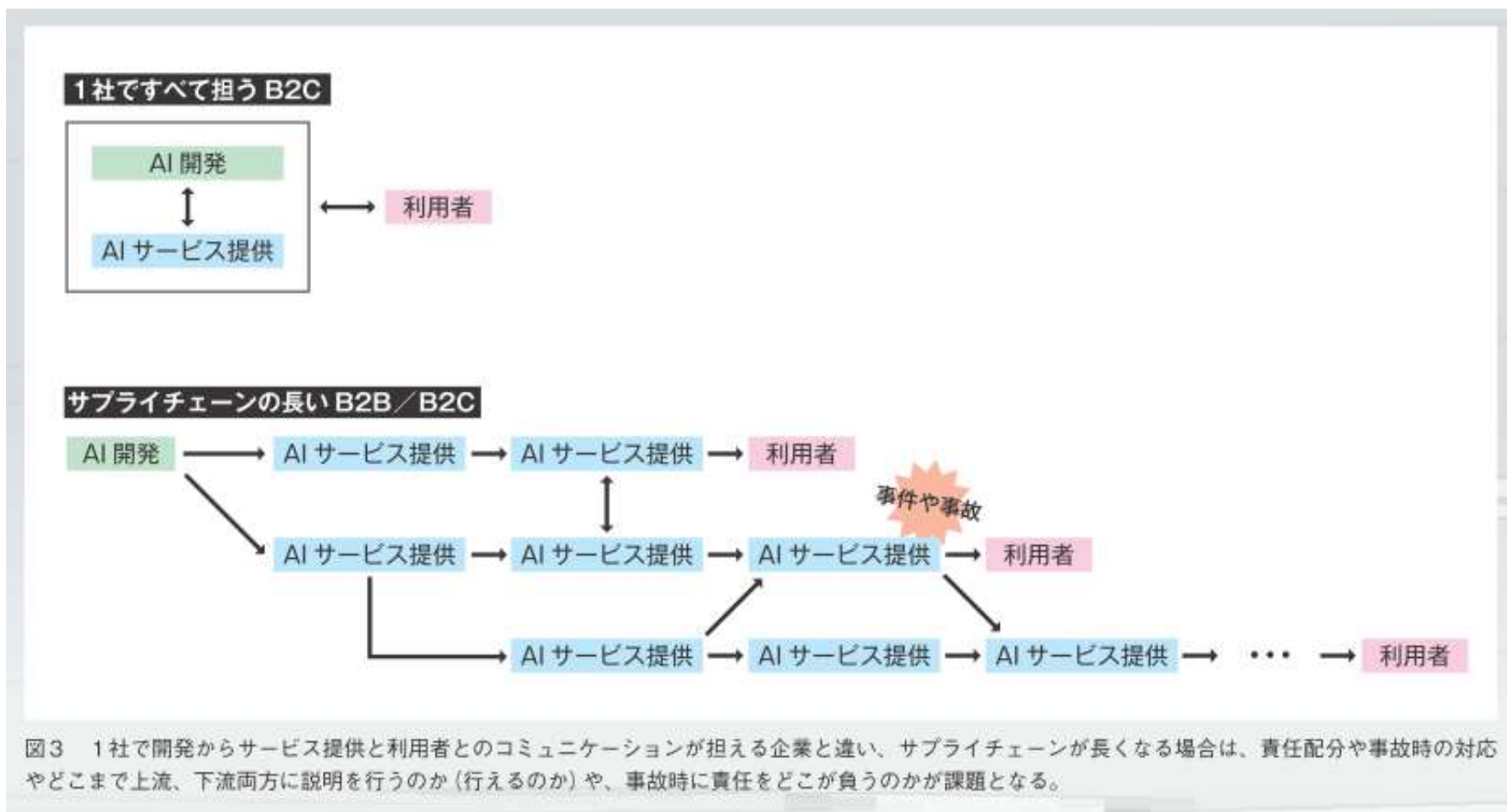


図3 1社で開発からサービス提供と利用者とのコミュニケーションが担える企業と違い、サプライチェーンが長くなる場合は、責任配分や事故時の対応やどこまで上流、下流両方に説明を行うのか(行えるのか)や、事故時に責任をどこが負うのかが課題となる。

# 対応1: AI原則と価値をめぐる議論

発表年	日本	国際組織
2016	AIネットワーク化の影響とリスク	Partnership on AI/信条 (Tenets)
		IEEE/倫理的に調和した設計バージョン1
2017	人工知能学会倫理委員会/倫理指針	Future of Life Institute/アシロマAI23原則
	総務省情報通信政策研究所/AI研究開発ガイドライン	
2018		Public Voice, EPIC/AIに対するユニバーサルガイドライン
		AI4People/良いAI社会のための倫理敵な枠組み
2019	総務省情報通信政策研究所/AI利活用ガイドライン	欧州委員会/信頼できるAIのための倫理ガイドライン
	内閣府/人間中心のAI社会原則	IEEE/倫理的に調和した設計 第一版
2020		OECD/AIに関するOECD原則
		欧州委員会/AI白書
		UNESCO/人工知能の倫理に関する勧告バージョン1

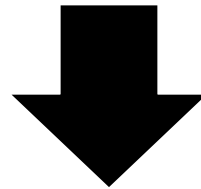
# 対応2: 原則から実践へ

## AIガバナンス

1. 企業内組織ガバナンス整備やバイ・デザイン観点やユーザとのインタラクションを含めた設計思想の徹底
2. 業界標準やガイドライン、保険や監査といった企業外との連携
3. 事故調査や内部告発制度など政策の観点からガバナンスを補強するインセンティブを社会システムとして埋め込む必要
  - 政府調達参加条件として企業内部でのAIガバナンスがあることを要求する国
  - 国際標準や認証に関する議論もある
4. 司法制度や法制度のようにより強いガバナンス
5. 国民、市民、消費者としての一人一人のリテラシー向上や事件・事故時の救済対応
6. 産学官民を含む様々なアクタによる対話や熟議の場作りと、議論やベストプラクティス（時には失敗事例を含む）を蓄積・共有するためのフレームワーク

# まとめと課題

- コリングリッジのジレンマ
  - 技術が社会で使われる前にその影響力を予測することは難しい
  - 一度普及してしまった技術は制御するのが難しい



- 現在は「社会実験」ではなく「実験社会」
- 私たち一人一人の役割と責任とは？